

とみることもできるのではなからうか。こうしたシュードラの範疇の拡大とは逆に、かつてシュードラとみなされていた一部の者たちが不可触民としてシュードラ以下の地位に落とされていったのである。

以上やや批判的にシャルマの著書を紹介してきたが、古代インドのシュードラの歴史を全体的に論じた本書がもつ先駆的な意義は高く評価されるべきであらうし、また冒頭でも記したように、初版以後二〇年以上たった今日においても、すぐれた着想と網羅的な史料蒐集との両面において本書をしのぐ業績は発表されていない。評者自身、これまでシュードラそのものの研究を迂回してきたが、今後、シャルマの提起した多くの重要問題をさらに綿密に検討し、シュードラの実態をできるだけ明らかにしていきたいと考えている。

R. S. Sharma, *Satras in Ancient India, A Social History of Lower Order down to circa A. D. 600*, 2nd rev. ed., Motilal Banarsidass. Delhi etc., 1980.

G・W・B・ハンティンフォード訳註

## エリュトウラー海案内記

部 勇 造

本書は、ローマ帝政期にエジプト在住のギリシア商人もしくは船乗りにより著わされたと言われる『エリュトウラー海案内記』*Periplus Maris Erythraei* の新しい訳註書である。この書の現存する写本としては、九一〇世紀のものと言われるハイデルンルック大学所蔵本 (*Codex Palatinus Graecus*, 398) と一四一一五世紀のものと言われる大英博物館所蔵本 (*Add. Ms.*: 19391) の二種があり、後者は前者より前者と共通の原本からの転写であらうと考えられている。数種の校訂本のなかで、フリヌック本 (*Hj. Frisk, Le Périphe de la Mer Erythré, suivi d'une étude sur la tradition et la langue*, Göteborg, 1927) が写本に最も忠実で、現在一般に使用されている。訳註書も数種あるが、中でも詳細を極めていて今日なお最も広く利用されているのがシヨマン本 (*W. H. Schoff, The Periplus of the Erythraean Sea*, London-New York, 1912) である。但しフリヌック本を利用しえなかったシヨマン氏は主としてシユラー本

(C. Miller, *Geographi Graeci Mores* I, Paris, 1855, pp. 257-305) に拠っている。我が国にも周知の如く村川堅太郎氏の訳註書『エリュトウラー海案内記』(生活社、一九四六年)がある。氏の場合はフリスク本を底本とし、必要に応じてミュラー、ファブリキウス (B. Fabricius, *Der Periplus des Erythraischen Meeres von einer Unbekannten*, Leipzig, 1883) 両氏の改訂・補修を採用している。

この二冊、ベッキンガム氏 C.F. Beckingham のはしがきによると、訳註者のハンティンフォード氏 G.W.B. Huntingford はこの書の刊行に先立ち一九七八年二月二十九日に亡くなっており、しかもそれ以前から致命的な重病の床にあって、校正を含めて本書の仕上げの作業が十分に出来ず、ベッキンガム氏を始めとする数人の人達の援助によって本書もようやく世に出たようである。一九二〇年に初めてアフリカを訪れた時より『案内記』に興味を持っていたそうであるが、スペインのマラガでの療養生活の為、必要な文献を参照する便宜を欠き、したがって自分の意見を十分に練り上げることも出来なかつたという。

まず本書の構成から紹介すると、ベッキンガム氏のはしがき及び訳註者自身のそれに続いて、

#### 序文・凡例・地名目次

#### 訳文・訳註

#### 付録 一、『案内記』の地誌

- 二、エリュトウラー海の産物・輸出入品
- 三、諸地域の民族誌・歴史
- 四、エリュトウラー海の船舶
- 五、象狩り
- 六、「月の山」

アガタルキデス『エリュトウラー海について』よりの抜粋 (訳文と訳註)

#### 参考文献目録・索引

さて、既に数種の訳註書の存在する『案内記』を新たに翻訳し直し註釈を施すからには、そこにそれなりの理由がある筈である。本訳註書の意義は何か。ハンティンフォード氏自身のはしがき及び序文によると、従来の三種の英訳と異なりフリスク本を底本とした点に本書の特色があり、原本に最も忠実な英訳であるという点、就中現在欧米で最もよく利用されているショップ訳よりも原本の趣きをよく伝えているという点を氏は誇っている。確かに、フリスク本が世に出る前に著わされたショップ氏の訳註書は、ミュラー本を底本としていることと、翻訳の流儀が所謂自由訳である為、必ずしも原本の趣きを正確に伝えているとは言いがたい。したがって、フリスク本を底本として原本により忠実な翻訳を英語読者に提供することは、それ自体大いに有意義なことと言える。しか

し、最良の底本を選びさえすればそれで直ちに翻訳までがよくなる訳ではあるまい。フリスクの校訂本が如何にすぐれたものであれ、原本は依然多くの難解な箇所を含み、研究者の間でその解釈はしばしば分れている。これを正しく解釈する為には、ギリシア語に堪能であることに加えて、記述の対象となつてゐる諸地域に関する十分な地誌的・民族誌的知識が要求される。ではハンティンフォード氏の翻訳如何。底本の異なるショップ訳との比較は、ハンティンフォード訳の適否を知る上でそれほど有効とは思えない。我々は幸に後者同様フリスク本を底本とした村川訳を有しているから、この底本を同じくする両訳書と比較検討し、両者の間に相違のある場合にはフリスク本を参照することにより、夫々の翻訳書としての価値を判断出来るのではなからうか。

さて、では両訳書と比較した結果はどうであつたか。結論を先に記すと、全六六節中九割近くの節になんらかの相違が見出される。このように多くの相違が生じた理由は多様であり、相違箇所のすべてにわたり両訳の適否を判断しうる為には、訳者同様或いはそれ以上の能力がなければならず、当評者の到底よくなしうるところではない。そこで以下においては第六節のみを例として挙げ、相違の生まれてくる理由の一端を明らかにするにとどめる。

両訳の異同を品目別に見ていくと、まずハンティンフォード

ド訳の *Barbaric unfilled cloth iudra Baβapara dyada* が村川訳では「バルバロイ向きの晒してない上衣」となつてゐる。ギリシア語の *iudra* のハンティンフォード訳はこの節では *cloth* であるが、第七節では *clothing* となつてゐる。訳語を区別した理由は明示されていないが、文脈に従つてということなのであろうか。なお第七節の *iudra* は、本文・付録では *clothing* と訳されているにも拘らず索引では *cloth* となつており、氏がいずれの訳語を適當と考へていたのかどうもよくわからない。このような例は他にもいくつもあり、例えば *ikraos* は節により *incense/frankincense* と訳語が区別されているだけでなく、同じ一つの言葉でも本文・付録・索引間でしばしば訳語の統一を欠いている。また *kyrados* は第七・八節の *teparabatos* に対立する語でハンティンフォード氏・ショップ氏ともに前者を *unfilled* 又は *undressed* 後者を *dressed* と訳しているのに対し、村川氏はこれらを「晒してない／晒した」と訳している。ここで問題になつてゐるのはおそらく亜麻布の類の仕上げの工程なのであろうが、学に乏しい評者にはこの工程を表わすのに「晒す」という語が果たして適しているか否かの判断がつかない。

次に *spurious coloured cloaks*、ハンティンフォード氏は *αβόλαι χρωματινοι υβόαι* とする原語を挙げているが、フ

リスタ本に照らすと *χρυσάκτιοι* と *υββαί* が逆になつてゐる。この種の不注意に起因する誤りも本訳註書にはしばしば見られる。訳註者の依頼を受けて草稿の最後の仕上げをした人は、フリスタ本との対照まではおそらく行なわなかつたのであろう。ところで *υββος* は本訳註書では一貫して *spurious* と訳されているが村川訳では「混紡」(第六・四九節) 或いは「不純」(第二八・三九節) と訳されている。村川氏はこの語を *ατλαός* の対立語と解し後者を「本物の」(第六・二四・二八・四九節) 或いは「混ぜ物のない」(第三九・四九節) と訳している。これに対しハンティンフォード氏はこれを *unlined* (第六・二四・二八・三九・四九節) 或いは *single* (第二四節) と訳しており、別に *υββος* の対立語とは考えていない。村川氏の *υββος* の訳が *ατλαός* の解釈に基づいていることは明らかであるが、後者が正確にはどのような意味なのか前後の文脈を検討しても評者には判断がつかなくかつた。因みにシヨッフ氏はこれを *skin* 又は *plain* と訳している。このように、フリスタ本を参照しても前後の文脈を検討しても、いずれの解釈が正しいのか判断することの難しい訳語の相違が非常に多い。

*διαδοσσία* は *fringed mantles* と訳すより、村川氏の如く「二重縁付きの外套」とした方が正確な訳と言える。シヨッフ氏も *double fringed* と訳している。

次の二行にわたる *Several sorts of glassware/imitation nurrhine ware made in Diospolis* はフリスタ本では *ἑτάλιας ἑκαλίης τριείου γένη καὶ ἄλλης ποικίλης τῆς γυαλίης ἐν Διοσπόλει* となつてゐる。したがつて *several sorts of glassware* と *nurrhine ware* の両方にかかるべきものと思われる。この部分の村川訳は「ガラス及び別のデオホリス産の「瑪瑙製品」の教種」となつており、日本文の構造的制約から修飾関係が必ずしも明確でない。原文では一統の部分を品目別に機械的に改行したことによる同種の誤りとして、同じ第六節の *Cloaks of cloth/Unlined garments, not of much value*。この原文は *ἱματίων ἀβόλλων καὶ χρυσάκτιοι, οὐ πολλοὶ δὲ τούτων* であるから、*not of much value* は二品目のかかることを解すべきである。なお *ἱματίων* をハンティンフォード氏は *ἀβόλλων* にかかると修飾語と解しているが、村川氏はこれを「衣服では……軍人外套と皮衣」と訳し、シヨッフ氏も同様の解釈をとつてゐる。また第八節の *Coinage, but not much/Gold and silver*。この原文は *ὄψακτιον οὐ πολύ, καὶ χρυσόν δὲ καὶ ἀργύρον* であるから「金・銀」は「貨幣」にかかると修飾語ととり、村川・シヨッフ両氏のように「金・銀貨」と訳するのが正しい。因みに付録二の目録にはこの *gold and silver* が落着いてゐる。さらに第二四節の *Wine/Corn, not much*,

…この原文は *oibos te kai otros oí rotis*、であるが、すべに続け、「for the country produces a moderate amount of corn and plenty of wine」とあるのだから、この *oibos* not much は wine, corn の両語にかけなくてはならない。

*Orothallos, ophyallos* 村川訳では「真鍮」となっている。ハンティンフォード氏によると、銅の合金には相違ないがその成分は時代により変化し、初期には銅と銀の合金、後に亜鉛が銀に代ったという。

*reukra* は axes と訳したのでは不正確で、やはり村川訳のように「小斧」とすべきであらう。(シムップ訳では small axes)

ハンティンフォード訳で swords となっている *lukaratai* を村川氏は「短刀」と訳している。いずれの訳をとるべきか評者には判断がつかかねる。

Ladikean and Italian wine, but not much の次に *kai Zakon oí rotis* の訳(村川訳の「少量のオリブ油」に相当する部分)が脱落している。このオリブ油は付録二の目録には挙げられているが、索引ではやはり落ちてゐる。これと同様の明らかに不注意に起因すると思われる脱落が本訳書には数箇所見られ、校正を含めて仕上げ作業の杜撰さを窺わせる。村川訳との対比で脱落箇所を挙げると、第二節「造ら

れた」、第六節「少量のオリブ油」、第七節「の汁」、第一節「所謂象の川」(ハンティンフォード氏は脚註において、この部分も後世の挿入としているが、そうではあるまい)。  
第三〇節「島の少数の住民は陸地に面する島の北側の一方にのみ住んで居り、彼等は外来者で」、第三三節「此の島の幅は約二百スタディオーン、長さは約六百スタディオーンで」、第五〇節「上手に当り東に向いた」、第六三節「正に昇る朝日の下に位し」に相当する部分である。

このように第六節を検討しただけでも、ハンティンフォード訳と村川訳との間には多くの相違があり、概して後者が原本により忠実に信用のおけることがわかる。評者は未だ全節にわたって両訳書のすべての相違箇所を詳細に検討した訳ではないが、評者の調べた範囲内では概ね第六節と同様の結果が得られている。したがって少くとも本文の翻訳部分に関する限り、ハンティンフォード訳は村川訳に劣り、我々はこれまで通り村川訳を『案内記』の最良の訳書と考えてよいと思う。ただ第六節からも窺えるように、村川訳にも訳語の選定や修飾関係の表現法等になお考慮の余地があるようなので、それをチェックするという形で利用するのなら、このハンティンフォード訳にもそれなりの価値はあるう。ただその場合にも底本のフリスト本との対照が絶対必要条件なのを言うまでもない。

ところで、ハンティンフォード氏は翻訳を進めるにあたり、マックリンドル氏の訳註書 (J. W. McCrindle, *The Commerce and Navigation of the Erythraean Sea*, Bombay, 1879, repr. 1973) をしばしば参照したことが訳註より窺える。それに対し、驚くべきことながらジョッフ氏のを参照した形跡が全くないのである。巻末の参考文献目録にはジョッフ本も挙げられているが、ハンティンフォード氏は実際にはジョッフ本を見ていないのではないかとさえ思える。もし仮に見ていながらこれを参照しなかったとするなら、これは実に不当な態度と言わざるをえない。何故なら、確かにジョッフ訳の底本はハンティンフォード訳のそれとは異なり、また自由訳すぎるといふ欠点を有しているとはいへ、難解な原文の解釈に際しジョッフ訳はなお十分参照するに値するものであり、事実、第六節だけでもジョッフ訳がハンティンフォード訳に勝っている箇所が少なからず見出せるからである。またジョッフ本の真価がその詳細な註釈にあることを知っているなら、これにただの一度も言及せず済ませることなど出来よう筈もない。マックリンドル本を参照しながらジョッフ本を無視したハンティンフォード氏の態度は全く不可解と言う外ない。

では次に新しい訳註書の価値を判断するもう一つの方法と

して、訳註及びそれに続く付録を検討してみよう。『案内記』の訳釈は、従来の訳註書でもそうであったように、ローマ帝政期の東海上交易の研究書としての性格を備えていなければならぬ。しかしこの観点から眺める時、本訳註書は一九八〇年に世に出た註釈書としては残念ながら失格と言わざるをえない。その最大の理由は訳註者の利用しえた文献が余りにも不十分だったことによる。参考文献目録には *Ancient* と *Modern* に分けて八〇点余りの文献が列挙されているが、そのうち *Modern* 欄に挙げられている六三点のうち一九六〇年以降のものは僅か一三点、言語別に見ると英語以外の文献は六三点中一四点、このうち一九六〇年以降のものは二点にすぎない。さらに問題なのは、この欄に挙げられている文献の中に訳註者が直接目を通していないものもかなり含まれている可能性があることである。ジョッフ氏の訳註書が参照された形跡の全くないことは既に述べた。また『案内記』の成立年代を論ずるにあたり訳註者は、スタルキイ師 J. Sackys が *Un contrat nabatéen sur papyrus, Revue Biblique*, 1954, pp. 161-181 において従来知られているのは別のナバタイ王マリカスの存在を示唆したと述べているが、これは事実と反することから見て、訳註者自身はこの論文には目を通していないと思われる。(なお、参考文献目録にこの論文の掲載年を一九五一年としてあるがこれは一九五四年の誤

り。) *Journal of Roman Studies* 誌上に発表された  
 メレティス氏 D. Meredith の論文にして、参考文獻目錄  
 には挙げてあるが訳註者が直接目を通していないことは第一  
 九節の訳註一より明白に看取出来る。このように見てくると、  
 ハンティンフォード氏が近年の各方面での新しい研究成  
 果を盛込んだ註釈を期待出来ぬのは明らかである。一例と  
 して評者の専門とする古代南アラビアについて見ると、関連  
 文獻は僅か二点 E. Glaser, *Skizze der Geschichte und*  
*Geographie Arabiens*, Berlin, 1890 及び J. Pirenne, *Le*  
*royaume sud-arabe de Qataban et sa datation*, Louvain,  
 1961 が挙げられているにすぎず、しかも訳註者が後者に実  
 際に目を通したかどうかはなほだ疑わしい。このような情況  
 では、ここ二〇年余りの間に研究の著しく進んだ南アラビア  
 について満足な註釈が書けよう筈もない。訳註と付録全体を  
 見渡しても、訳註者が専門としている東アフリカ以外では、  
 英人研究者の近年の研究成果を利用したインダの部分がやや  
 詳しいだけで、他の部分には特に注目すべき記事はない。こ  
 の註釈部の内容の乏しきは、近年世に出たローマ帝政期の東  
 方交易を扱ったラッシュマ氏の研究 M.G. Raschke, *New*  
*Studies in Roman Commerce with the East*, in: H.  
 Temporini ed., *Aufstieg und Niedergang der römischen*  
*Welt*, II 9, 2, Berlin-New York, 1978, pp. 604-

批評と紹介 終

1361の第四章や、アフリカ周辺における地中海人の活動を  
 扱ったマサンジ氏の研究 J. Desanges, *Recherches sur*  
*l'activité des Méditerranéens aux confins de l'Afrique*  
*(Ve siècle avant J.-C. - IVe siècle après J.-C.)*, Rome,  
 1978. の第三章に比較すると一層際立つ。

挿絵は九葉掲げられているが、いずれも東アフリカ関係のも  
 ので、ここにも既に指摘した本訳註書の限界が示されてい  
 る。地図は一一葉、此方は記述の対象となった全地域をおお  
 っている。ただどうしたことが目次によれば一八一―一九頁の  
 間に挟まれている筈の地図一が実際には七六―七七頁の間に  
 置かれている。これらの挿絵・地図のうち挿絵一は注意を要  
 する。これはアクスムとその外港アドダリスの模様を伝えた  
 第四節に添えられたもので、「アドダリとフトレレイの玉座」  
 という説明がついている。ハンティンフォード氏によると、  
 この図は六世紀のコスマス・インディオプレウステス Cos-  
 mas Indicopleustes のスケッチに基づいたもので、コスマ  
 スの著書の「マタリントル」訳 J.W. McCrimde, *The Chris-  
 tian Topography of Cosmas*, London, 1897 所収の挿  
 絵より reproduce されたものである。そこでこの両  
 図を比較してみると、前者は後者の文字通りの複製という訳  
 ではない、後者に若干手を加え書き直したもので、図中に記  
 されたギリシヤ文字の配置が両図では異なっている。ナンテ

インフォード氏はマックリンドル訳の底本の校訂者モンフォード氏 B. de Montfaucon が依頼した写本 Laur. Plut. IX, 28 又は別系統の写本 Vat. Gr. 699 所収の挿絵も参照したもので、これをこうして “MS Cod. Vat. Gr. 699, which shows the throne from a different angle with a tablet lying across it and another tablet standing beside it; ... Unfortunately this picture is not clear enough to reproduce, but McCrindle's drawing gives a good enough idea of it.” と述べている。しかしこの説明が事実を正確に伝えていないことは、コスマスの著作の挿絵に関連した部分を読み、Vat. Gr. 699 所収の問題の挿絵を一見すれば明らかとなる。この挿絵はコスマスの新しい訳註書 Cosmas Indicoepilestus, *Topographie christiennae*. Introduction, texte critique, illustration, traduction et notes par W. Wolska-Conus, Paris, 1968, 1970 の第一巻三六七頁に掲げられているので、我々も容易に目にする事が出来る。本文の該当箇所 Livre II, 54-55 を読みつづこの図を見れば、モンフォード氏が a tablet lying across it と呼んだものが実は玉座の左右の肘掛けであり、またもう一つの tablet は玉座の横に立っているのではなく後に横たわっていることは一目瞭然である。このことはマックリンドル氏の訳によっても十分明らかであり、挿絵のみならず本文にも当然目を通して

ている筈のハンティンフォード氏が何故このような誤解をしたのか理解に苦しむ。さらに玉座の意匠や描かれている人物や建物の数がマックリンドル訳の挿絵とウォルスカ・コニーエ訳のそれとは異なっているが、後者の方がコスマスの原図により忠実なことは本文の記事を参照すれば何の疑いもない。評者の見解によれば、マックリンドル訳の挿絵は原図の趣きを正しく伝えているとは言えず、むしろ読者の誤解を招きかねない。これに更に手を加えたハンティンフォード氏の挿絵については改めて述べるまでもなからう。因みにウォルスカ・コニーエ女史の研究によれば、マックリンドル訳のもととなった写本 Laur. Plut. IX, 28 は諸写本のうち、本文に閱しても挿絵に閱しても原本より最も隔たっているという。

最後に、序文で論じられている『案内記』の成立年代について一言。この年代を知る手懸りとしてハンティンフォード氏は第一九・二六・四一・五二節をとりあげて検討し、このうち二六節を除く他の三節をもとに西暦九五—一三〇年の成立との結論を得ている。第一九節はナバタイ王マリカスに言及した節で、従来『案内記』の成立年代を決定する上で最も有力視されてきた。氏はグートシシュミット氏が一八八五年に提唱したナバタイ王の系図 A. von Gutschmid, in: J. Euting, *Nabatäische Inschriften aus Arabien*, Berlin, 1885, pp. 81-89 (評者未見) にコースマン氏 A.F.L. Dees-



ton)よりの伝聞に基づくスタルキイ師の前述の研究を継ぎ足した結果、その存在の可能性が論争の的となつてゐるマリカス三世に加えて第四のマリカスの存在さえ示唆するに至つてゐるが、マリカス論争に關するこれほどの誤解も珍しい。近年のマリカス論争は、スタルキイ師の上掲論文をもとにデュッソー氏 R. Dussaud やピレンヌ女史 J. Pirenne が、西曆一〇六年のローマ併合後のペトラにマリカスという名の首長(マリカス三世)の存在した可能性を主張してゐるのに対し、多くの研究者就中スタルキイ師自身が反論したことから生じたものであるが、この論争の過程においておよそ一世紀前のグートシュミット説を論拠として提出する者もなければ四人目のマリカスの存在を主張する者もなく、ハンティンフォード氏は問題を十分理解せぬ儘これを年代決定の論拠としたのであらう。因みにスタルキイ師はその後発表した論文の中で (*Petra et la Nabatène, Supplément au Dictionnaire de la Bible*, fasc. 39, Paris, 1964, col. 918) 師が先の論文で紹介したバビルス契約文書がマリカス三世説の論拠となりえぬことを強調するとともに、この文書が発見されたのと同じ洞窟よりその後発見された同種の契約文書のいくつかがラヘル二世の時代のものであることを理由に、先に紹介した問題の文書も同王の時代に属するのであらう、そう考へることによりこの文書の書体についても無理なく説明出来ると述

べてゐる。

なお、第四一・五二節に關してハンティンフォード氏が記していることは、英人インド研究者の説への無批判な追従にすぎず、長い問論争の的になり未だ結論が得られていないというナハパーナ及びガウタミープトラハシヤータカルニの年代(山崎利男「インドの銅板文書の形式とそのはじまりについて」『東洋文化研究所紀要』八東京大学V七三、一九七七年三月、二一七—二二〇頁参照)に關し、英人研究者の見解に對立する諸説が全く無視されてゐる。またハンティンフォード氏自身の創見も見られぬ以上、この問題について評者がここで論ずる必要はあるまい。

以上をまとめると、本訳註書はフリスク本を底本とする最初の英訳書であるという点に意義は認められるものの、その訳文には誤訳や脱文が少なからず見られ必ずしも全面的に信頼することが出来ない。また訳註者が実際に参照した文献があまりにも限られていた為、註釈には近年の各方面での研究成果が盛り込まれておらず、それが本訳註書を精彩に欠けたものとしてゐる。しかし訳・註いづれの面においても、その不備の主たる原因が訳註者の重病にあつたことを思うと、一九二〇年よりおよそ六〇年間もこの書に關心を抱き続けながら、肝心の執筆の段階で病に倒れ草稿の推敲も思うに任せ

なかつた氏の無念は察せられた余である。

このたび、ロンドン氏によれば (M. Robinson, Le Pèrille de la mer Erythré, *Annuaire 1974/1975*, *École Pratique des Hautes Etudes (IV<sup>e</sup> section)*, Paris, 1975, p. 238) 現在ロニー氏 J. L. Miller が『案内記』の新しい訳註書を準備中とのことであり、またロニー氏も同書の新しい訳註書を準備中とのこと (ロニー氏前掲書六〇四頁以下)。両書の一、二の早行を期待した。

*The Perilous of the Erythraean Sea*, translated and edited by G. W. B. Huntingford, (Works issued by the Hakluyt Society, Second Series No. 151, issued for 1976). London: The Hakluyt Society, 1980. 225p.

〔後記〕

この機会に、『案内記』の南シバと関係の記事に関連した最近の研究を紹介しよう。まず乳香についての総合的な研究として W. W. Müller, Wehrnuch, *Supplement-Band XV der Realencyclopädie von Pauly-Wissowa*, München, 1978, col. 700-777. また植物学者トマス・ヘンリッシャー地方の紙香樹の調本報告として T. Monod, Les arbres à encens (*Boswellia sacra* Flückinger, 1876) dans le Hadramaout (Yémen du Sud), *Bull. Mus. natn. Hist. nat., Paris*, 4<sup>e</sup> sér., 1, 1979, section B, n° 3, pp.

131-169; J. Dupéron, Contribution à l'étude de *Boswellia sacra*: anatomie de la plante et de la tige âgée, *Ibid.*, pp. 171-189. 『案内記』第三二節のヨシカの地 Khor Rori で発見された古代南シバの碑文をめぐり、ヘンリッシャー王 I'add Yalit の Sa'kalan (『案内記』のサカリテーヌ) 地方における植民市 smrm (読み方は研究者により異なるが、モスカに相当する) の見方が有力) 建設を論じたものとして J. Pirenne, The Incense Port of Moscha (Khor Rori) in Dhofar, *Journal of Oman Studies*, I, 1975, pp. 81-96; H. von Wissmann, *Das Wehrnuchland Sa'kalan, Samarrum und Moscha*, Wien, 1977. なおこの植民市建設の年代については、碑文の書体の特徴をめぐりロニーヌ女史は前一世紀、ヴェスマン氏は後七〇年以前おそらくは後一世紀前半と推測している。この王が『案内記』のエレバソスに相当するか否かはともかくとして、植民市建設の時期がヘリッシャー海交易の発展期に一致していることは極めて興味深い。またロニーヌより発見された後七〇年八月九日の日付のゆるぎのない碑文の研究 G. Wagner, Une dédicace à Isis et à Héra de la part d'un négociant d'Aden, *Bull. de l'Institut français d'Archéologie orientale*, 76, 1976, pp. 277-281. この碑文作者がキリンノ谷を有するシバ商人と見ただけに注目してはならない。